

「乳房の表象」の意味と影響 Meanings and Influence of “the Breast Representation”

菅森 朝子
SUGAMORI Asako

For centuries, the breast has been given powerful and contradictory meanings. As Marilyn Yalom said, “Babies see food. Men see sex. Doctors see disease. Business people see dollar signs.” All female breasts are corded as “good breasts” and “bad breasts”. What kind of influence have the meanings of the breast representation had on women? In order to answer this question, this paper shows voices of 3 women who experienced breast cancer and mastectomy. Their breast representation is similar, but their attitude toward it is different. The issue is to see how we should place the breasts in women’s “living bodies” and “life”.

キーワード：乳房 (Breast)、身体表象 (Body Representation)、乳がん (Breast Cancer)

1. はじめに

女性の身体的特徴を表す部位である「乳房」。社会・文化の中で、あるときは母なるイメージ、あるときは女性性のイメージというように「複層的な意味」(山崎 2011: 8)を付与されてきた。その意味は固定的ではなく、時代や社会や立場によって変わる流動的なものである。

筆者はこれまで、乳がんを経験した女性たちを対象にインタビューを行い、語りの中から「乳がんの経験」が女性たちにどのような影響を与え、変化をもたらすのかを明らかにしようと取り組んできた。言うまでもなく、乳がんは乳房に発生するがんである。罹患者のうち99.5%⁽¹⁾が女性で、日本では年間に推定8.9万人⁽²⁾の女性が乳がんと診断され、その数は急増している。乳がんが発見されると、がん細胞を取り除くために外科手術で乳房を部分切除または全摘をする。乳房の変形・喪失によって「女性性が傷ついた」ことを語る人は少なくない。「乳がんの経験」をとらえていくにあたり、社会・文化において乳房が付与されてきた「複層的な意味」を理解することは避けて通れない。

本稿では、社会・文化の中で、「乳房」が誰によってどのようにまなざされてきたのか、「乳房の表象」の議論を整理する。その上で、「乳房の表象」の意味が「乳房をもつ」女性たちに与えてきた影響について、「乳房の表象」の議論だけでなく、乳がんを経験した女性たちの語りを通して検討していく。

2. 乳房はどのようにまなざされてきたのか

(1) 「乳房の表象」の先行研究

これまでに日本語で書かれたあるいは日本語に翻訳された「乳房の表象」に関する総論は、さほど多くない。『乳房の神話学』(ROMI 1965=1997)は、乳房に対する男性の欲望の歴史を分厚く記述する。『乳房論』(Yalom 1997=1998)は、古代から現代に至るまで2500年の西洋史を振り返り、乳房が持つ意味の歴史や乳房が直面してきた問題点を紹介する。

『乳房の文化論』(乳房文化研究会編 2015)は、「乳房」を学際的に研究することを目的にした研究会、「乳房文化研究会」の講演録の一部をまとめたものである。西洋文化だけでなく、日本、中国、インドにおける乳房文化についても紹介している。『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』(山崎・池川・新保・千葉・黒田 2011)は、社会状況の変革や価値観の揺らぎなど「時代の危機」に乳房の表象が生産され消費される契機に着目し、乳房の表象と社会との関係、背景にあるジェンダーの力学を読み解く。『乳房の文化論』、『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』の2冊は、複数の論者がそれぞれの専門分野の知見より乳房について論じている。論者の専門領域は、社会学、中国文学、宗教学、考古学、西洋美術史、心理学、マンガ研究、服装研究、映画、日本美術史と幅広く、様々な立場、地域、時代、領域、メディアにおいて、乳房が表象されてきたことを物語っている。

『乳房論』は西洋社会における「乳房の表象」を網羅的に扱うものだが、日本の状況を含めた「乳房の表象」を網羅的に扱うものは少ない。本稿では限られた紙幅ながら、日本の状況を含めたこれまでの「乳房の表象」の議論が把握できるよう多面的に記述し、乳房に付与されてきた「複層的な意味」の様相を浮き彫りにしていく。

(2) 乳房を求める様々な「主体」

ヤーロムは、乳房が様々な「主体」に求められてきたことを次のように表す。

乳房に何を求めるかは、これもそれぞれの立場によって異なる。赤ん坊は食料を、男性はセックスを、医者は疾患を、商売人はドル・マークを見る。宗教関係者は乳房を霊的なシンボルに変えてしまい、政治家たちは愛国的宣伝に利用する。精神分析学者はあたかも不動の一枚岩のように、乳房を無意識の中心に据える。このような意味の多様性は、人間の想像を掻き立てる乳房の特徴を表している。(Yalom 1997=1998: 408)

次項より、「赤ん坊」「男性」「医師」「商売人」「政治家」という5つの「主体」から見た乳房の議論をみていく。

(3) 「赤ん坊」から見た乳房

赤ん坊にとって母乳は生まれて初めての食べ物である。赤ん坊を育むために乳が満ちる「母」の乳房は神秘的な存在で、聖なる対象として古今東西の宗教・文化の枠組みの中で扱われてきた。

ヨーロッパでは、聖母マリアが幼子イエス・キリストに授乳する姿が繰り返し描かれてきた。最初にその姿が描かれたのは、3世紀ごろローマにあるブリッシラのカタコンベ（地下墓所）だった。当時、ローマ帝国においてキリスト教は禁じられ弾圧されていた。迫害を恐れた人々は授乳する聖母像を地下にひそかに描き、信仰を守った。以来、授乳する聖母像はヨーロッパの人々の祈りを受け止めてきた（山口 2014: 150）。14世紀前半、ヨーロッパ全体が食糧難と経済危機に見舞われた頃、イタリア中部のトスカナ地方では授乳するマリア像が数多く描かれた。マリアはわが子に「食べ物」を、キリスト教徒に「食べ物としてのキリスト」を与える者として暗示された（山口 2014: 155）。このように授乳の聖母像は、その乳房で「慈悲と救済の糧を与える『万人の母』として崇敬を集めた」（新保 2011: 136）。他方、当時ヨーロッパで大流行したペストの犠牲者のイメージとして、「死せる母とその乳房にすがりつゝの嬰兒」のモチーフが描かれた。「健やかなキリストを抱くマリアが『生-慈愛-救済』を象徴するのと正反対にペストに斃れた母のむき出しの乳房は『死-不完全な母性-罪』を想起させる」（新保 2011: 153-4）。

一方、日本では、現存する最古の和歌集である『万葉集』が、7世紀後半から8世紀後半にかけて編まれた。『万葉集』に出てくる「母」にかかる枕詞は「垂乳根」である。「垂乳根」の語源は、「乳の満ち足りた」という意味である。生命の満ちあふれてくる根源である「垂乳根の母」として乳房は表象された。乳房に働く強烈な力には「生成する産出力に対する畏怖と神秘」（鎌田 2014: 95）が含まれている。『母』の乳房からは乳があふれてくる。あふれてくるということは、身体内部に含まれているモノが噴出してくることであり、それは、火山からマグマが噴出するさまや、泉から清水が噴出する様を連想させ、通常は目に見えない何モノかが身体のある部位から噴出してくる不思議で畏怖すべき神秘的な現象を想起させる」（鎌田 2014: 95）。

「母」なる乳房は、古くから神秘、命、豊かさ、慈悲、親密さ、愛の意味を付与され、親しみと畏怖を以って扱われ、社会の危機的状況では「救済」のイメージを担った。授乳する「母」の乳房が讃えられる一方で、授乳しない・授乳できない女性の乳房は「不完全な母性」として断罪されてきた。

(4) 「男性」から見た乳房

現代の社会では、男性たちが女性の乳房を性的なシンボルとしてとらえフェティシズムを持ってまなざすことは「普通のこと」とされる。だが、そのまなざしは古今東西共通ではなく、「歴史的な、文化的な変化」（上野 2014: 50）に富んでいる。

西洋文化では中世後期以降に「性的な意味を持つ乳房への熱狂が育っていった」（Yalom 1997=1998: 134）。そのことを象徴する絵画に、15世紀後半のフランス国王の愛妾アニエス・ソレルを描いた、ジャン・フーケの『聖母子』がある。キャンバスの中央には胴着からこぼれた肉感的な乳房が描かれ、鑑賞者の目をいやでも引きつける。そこに描かれた乳房は同じ絵の中にいる子どものためではなく、鑑賞者（＝男性）の目を楽しませるためにある。この肖像画が表すように「母性とつながった聖なる乳房のイメージが、性的な歓びを表すイメージへと移行していった」（Yalom 1997=1998: 76）。中世後期は小ぶりで引き締まった乳房が好まれたが、ルネサンス後期以降は大きな乳房が好まれるようになった。

他方、古来の日本文化では乳房に「母」の意味はあったが、「性的」な意味はなかった。

その証拠に、江戸時代の春画において乳房は強調されていない（上野 2014）。また、比較的近年まで公共の場における授乳は珍しいことではなく、ごくありふれた光景だった（上野 2014）。明治時代以降に西洋文化が導入された際に「性的な乳房」の価値観も取り入れられ、戦後になり普及した。

北山は、現代の乳房の役割がセクシュアルな「よろこび」の乳房に偏重していると指摘する（北山 2014: 29）。その背景には視覚メディアの発達があるという。第2次世界大戦後、アメリカ映画を筆頭に映画が視覚メディアの中心になった。映画では、身体全体のイメージより個別の部位が集中的に利用され、とりわけ乳房が利用された。「バストを見せるということは、身体他の部分をじかに見せることができないからバストで代替させていて、つまり、身体他のところ、具体的には性器を想像させるためにきっかけとして胸を見せていた」（北山 2014: 30）。

マンガ研究を行う表は、「少年マンガ誌に登場する豊かな乳房を持った美少女」に着目し、彼女たちを性的対象としてまなざす読者や作り手の視線の有り様とその変遷をたどる（表 2014）。日本のマンガ雑誌の特徴は、編集者がマンガ制作に深く関与し、作者の創作意欲と読者のニーズをすり合わせ、売れる雑誌作りをしていることにある。それゆえ、「読者の赤裸々な思いに寄り添おうとする」傾向があり、マンガが「人にいえない孤独な悩み」を受け止めてくれたり、「荒々しい欲望のはけ口」として機能している面も否めない（表 2014: 203）。1950年代から1960年代の少年マンガでは、女性キャラクターの存在は希薄だった。その背景には、「少年は女性を欲望してはならない」という大人の「抑圧」が働いていた。しかし、その状況は1960年代末から変化した。『ハレンチ学園』では、女子生徒たちの発達した乳房が描かれ、「スカートめくり」など男子生徒が女子生徒の身体を性的な対象として扱う様子が描かれた。1970年代末から1980年代にかけて、「ラブコメ」ブームが訪れた。『うる星やつら』は、主人公の諸星あたと同級生の三宅しのぶと美少女宇宙人・ラムとの三角関係を描く。ビキニ姿で肉感的な身体を持ち奔放なラムに対し、しのぶはセーラー服を着用し清楚だが“色気がない”とされる。乳房の大小が性的な成熟度や魅力と結び付けられているだけでなく、奔放で積極的な女と控えめな“待女”という性格や立ち位置の「差異」として表現された（表 2014: 214）。

中世後期の西洋文化において生じた「性的な乳房」という価値観は根強く、近代化とともに日本にも広まった。メディア・テクノロジーの発展とともに「性的な乳房の表象」は増加し、意味が強化されていった。男性たちは大きな乳房を好み、乳房の大小が「女性の性的な魅力を測る指標」として機能するようになった。

(5) 「医師」から見た乳房

医学において乳房は、子宮とともに「女性」という生物学的性を区分する1つの指標として認識されている。医学は乳房が持つ2つの特徴、乳汁の分泌と疾患に興味を寄せてきた。

黒田によると、ヒポクラテスは紀元前5世紀の「医学の祖」と称されるギリシャの医師で、それまでの呪術的医療と異なり、健康・病気を自然の現象と考え、科学に基づく医学の基礎を作った（黒田 2011）。ヒポクラテスは、「筋肉質でより完全な男性の体」と比べて女性の体は「軟弱で密度が薄い」とし、「男性の体を優れたもの、女性の体を劣ったもの」

と位置付けた。自然主義者で哲学者のアリストテレスは、ヒポクラテスの理論を発展させ、「男性よりも女性の胸が大きくなるのは月経によって、体の上部にある海綿状の乳房が空っぽになり、分泌液である乳がそこに向かうため」だとした。出産を経た母体から生み出される乳は、乳児だけでなく老若男女に効力を発揮する薬剤としても使用された。ローマの博物誌家・プリニウスは『博物誌』において、母乳の効能は目の疾病や外傷に効果があるほか、潰瘍にも効果があるとした。特に「男児を産んだ母親の母乳が一層有効」だという。黒田は、「完全な性としての男性を作り上げるためには万能的な効力を発揮する母乳が必要という考えから生まれたものだろう」と分析する（黒田 2011: 52）。

一般的に「医学」というと、「科学」的根拠に基づき、客観的で合理的で正しい知識体系として認識されている。しかし、実際には「時代や文化、地域が変わることによって変節していく」（黒田 2011: 24）もので、一貫した生物学的根拠があるのではない。医学の担い手には男性が圧倒的に多く、そのため医学における女性の身体や乳房のとらえ方には男性中心的な価値観が色濃く反映されている。

医学は乳汁のほか、乳房の疾患である「乳がん」にも関心を寄せてきた。乳がん手術に関する最も古い記録は6世紀のビザンティンの歴史編纂者・アエティオスによるものだ。乳房を切り、傷口を焼灼して出血を調節しながら乳がんを切除する手術方法は、その後数世紀に渡って標準的な治療となった。19世紀後半に外科手術に麻酔と消毒が普及し、19世紀末にはハルステッドによる乳房、リンパ節、大胸筋を全て除く根治的切除手術が標準治療となった。1960年代より放射線治療と化学療法が取り入れられるようになった。1970年代になると、ハルステッド法は必要以上に切除していると批判が起り、初期段階であれば部分切除と放射線を組み合わせることが有効な治療法として推奨されるようになった。2000年代からはホルモン療法が導入されている。医療が発達する一方で、欧米のみならず日本においても乳がんの罹患者数は急激に増加している。その原因として、西洋型の高脂肪な食生活、初潮年齢の低下、ライフスタイルの変化による出産年齢の高齢化などが挙げられる。ヤーロムは、乳がんの発生率の増加によって、乳房に「病と死の媒介者としての意味」が加わったと指摘する。「女性たちは自分の乳房を恐れ、潜在的な敵と見、乳房に潜んでいるかもしれない致命的な細胞相手に戦わなければならぬ」くなり、「医学的問題が乳房のエロティックな、また母性的な意味を急速に脅かしつつある」という（Yalom 1997=1998: 411-2）。

(6) 「商売人」から見た乳房

商業的な視点から見たとき、乳房には「無限の可能性がある」という（Yalom 1997=1998: 233）。ブラジャーや美容整形など乳房に関する商品の販売もあれば、乳房のイメージとセットにしたプロモーションもあり、「女性は乳房市場において購買者と販売者」である（Yalom 1997=1998: 233）。

ヤーロム、深井によると、西洋社会ではルネサンス以降にコルセットが使用されるようになった（Yalom 1997=1998, 深井 2014）。コルセットには主に2つの役割がある。1つは細いウエストを作ること、もう1つは乳房を支えることである。15世紀から16世紀にかけて、コルセットは乳房全体を覆い、乳房のふくらみは押さえられていた。17世紀になると、コルセットの前の部分が次第に低くなり、17世紀から18世紀にかけては乳房を極端

に豊かに見せる方向に向かった。18世紀のドレスは、華麗な絹織物を使った裾の広いスカートとその上に大きなデコルテを持つ小さな胴衣が載り、上半身をより小さく見せるというシルエットだった。当時のブルジョワ階級にとってコルセットは、労働に適さず、装着に召使いの手伝いを要する性質ゆえに、一般階級との差別化に欠かせないアイテムだった。19世紀の初めの時期には、コルセットを使用せず自然のままの形がよいとされた時期が訪れた。その後、製鉄技術の発達を背景に、再び女性らしさを押し出す方向に向かう。それまでのコルセットのボーンには鯨骨が使われていたが、19世紀からは鋼鉄が使用され、改良が進められた。「豊かなおっぱい、くびれたウエスト」が女性の美の理想となった。20世紀に入ると、コルセットから女性を解放しようという機運が高まり、コルセットは時代遅れになっていった。コルセットは次第に消滅し、ブラジャーとガードルに分裂した。1920年代は凹凸を持たない細身のシルエットが好まれ、1930年代はスリムだが流れるような曲線的なラインが好まれた。第2次世界大戦が終わると、再び豊かな胸が流行となった。1970年前後には、女性解放運動の中でフェミニストたちが「ブラ焼き」のパフォーマンスを行い、乳房の解放を謳った。だが、1980年代後半には、平たい胸から豊かな胸にトレンドが移った。1990年代に入ると、胸の谷間を作るブラジャーが一世を風靡した。

日本では文明開化によって洋装が取り入れられるときにコルセットが導入された。大正時代末ごろに洋装が流行し、併せてブラジャーが普及した。1990年代以降の日本では、ファッション化したカラフルな下着が普及した。女性たちは自らの身体で「私遊び」をし、「魅せるカラダ」を表現するようになった(米澤 2014: 278)。

19世紀になり技術革新によって色刷りのポスターが安く生産できるようになると、広告に乳房が使われるようになる。けれども、「ポスターを使って売られていたのは、乳房でもなければ、乳房用の下着でもなく、まったく関係のない商品だった」(Yalom 1997=1998: 270)。イタリアのリキュール「リクオーレ・ストレーガ」の1900年のポスターには、グラスの飲み物を飲もうとかがみこむ女性が描かれている。片方の乳房はテーブルに押し付けられ、もう片方の乳房はブラウスからいまにも零れ落ちそうである。そこには、「飲み物も乳房も容れ物から溢れそうだという隠喩」が潜んでいる (Yalom 1997=1998: 272)。日本初のヌードポスターは、1922年の「赤玉ポートワイン」のポスターである。寿屋洋酒店(現在のサントリーホールディングス)は、創業者・鳥居信治郎の「いいものを作ってもそれを知ってもらわないことには売れない」という信念に基づき、上半身裸の女性がワイングラスを胸元に持って微笑むポスターを制作した。その告知効果はすさまじく、赤玉ポートワインは驚異的な売上げを記録した⁽³⁾。

ルネサンス期以降、このように乳房を対象とした商品が登場し、女性たちはトレンドにあわせて、自らの胸を平たくしたり豊かにしたりしてきた。現代では下着にとどまらず美容を目的に豊胸手術を行う人もいる。印刷技術をはじめとするメディア・テクノロジーの発展によって、乳房の表象を用いたプロモーションが行われるようになり、企業は乳房の表象が持つ価値を利用し、「おびただしい数の女性や男性のファンタジーの種を提供」することで利益を得ている (Yalom 1997=1998: 300)。

近年、企業は利益追求だけでなく社会的責任 (CSR= Corporate Social Responsibility) を果たすことが求められるようになった。女性向けの商品やサービスを提供する化粧品業界や下着業界、製薬会社や保険会社などが、2000年ごろからCSRの一環として乳がんの早期

発見・早期診断・早期治療の重要性を啓発する「ピンクリボン・キャンペーン」に協賛するようになり、その規模は年々拡大傾向にある。企業は現代の女性にとって代表的な病気である乳がんの啓発活動を支援することによって、顧客や社会からの信頼を獲得し、企業としてのイメージアップを図り、競争力を向上させようと努めている。

(7) 「政治家」から見た乳房

西洋社会では18世紀末より乳房と国家が結び付けられるようになった。フランスではフランス革命の頃、共和国を象徴する「マリアンヌ」という女性が登場した。マリアンヌは、フリジア帽⁽⁴⁾をかぶり、乳房を露出している。画家・ドラクロワの代表作『民衆を導く自由の女神』は、フランス7月革命を主題とした作品で、絵の中心には三色旗を翻し、乳房をあらわにし、勝利に導く、マリアンヌが描かれている。このとき、乳房は「自由、友愛、平等、愛国心、勇気、正義、寛容、富裕という共和国の理想を広く伝えるために利用された」(Yalom 1997=1998: 176)。

池川(2011)は、1931年の満州事変後から1945年の15年戦争戦時下に製作された日本映画の中の「授乳」にまつわるイメージ群を分析する。非常時が叫ばれながらもまだ社会に落ち着きのあった1935年に制作された『人生のお荷物』は、熟年夫婦とその子どもたちが登場し、母と娘の胸元が「過剰に母性的な乳房」「エロチックな乳房」として描かれた(池川 2011: 107)。1937年の日中戦争開戦とともに銃後映画は一気に様相を変えていく。エロチシズムが脱色され、母子家庭を描いた作品が増える。1941年の作品『ハナ子さん』のヒロインは「恋愛→結婚」を経て、「初産(男児誕生)→夫が出征」する。1944年の作品『おばあさん』になると、恋愛は省かれ「結婚→出征→初産」と駆け足のストーリー展開となる。また、戦時下ではタイトルに「母」と冠した映画が多数制作された。1942年の『日本の母』では子ども5人を育て上げた母親が登場する。母は息子が出征する前夜に痛かった授乳の思い出を語り、「乳離れの儀式」を行った子どもたちは、大東亜共栄圏建設へ旅立つ。このように「銃後映画において、市井の母たちの乳房は家族と国家をつなぐ回路へと飛躍し、「聖戦」に男児を捧げる国家的母性を構築していった」(池川 2011: 107)。「『血』と『大殺戮』の心理的補完物として人は、『生』と『生命』をイメージする必要があり、『民族統合の記号』として『母性のイメージ』を必要とした(池川 2011: 104)。1939年に映画法が制定され、政府は国民精神総動員運動の一環として映画を利用するようになり、中国大陸の戦地や占領地を舞台とした作品が制作された。映画の中で、母親たちは「支那軍」や「支那の匪賊」の暴力によって傷つけられていて授乳できない。授乳できない母親に代わり、日本兵たちが赤ん坊を保護して栄養を与える。赤ん坊殺しを行う敵を想起させ、中国人の赤ん坊を救済する日本人を「英雄」として描き出す。そのようにして戦争の「大義」「アジアを解放する日本」を発信した。15年戦争という危機の中で、映画は既存の物語の枠組みに依拠しながら、プロパガンダの位相を獲得していった。その際に、乳房イコール「次世代育成力」というイメージが構築された(池川 2011: 123)。

戦争に乳房のイメージが用いられたのは他国でも同様であった。第2次世界大戦中、アメリカの戦闘機には、性的パワーと破壊力を戦士に与える目的で上半身裸の女性が描かれた。兵士の「士気高揚」のために、上向きに突き出した乳房、長い脚を持つ女性たちのピンナップ写真が無料で配られた。それは、男たちが祖国に帰ったら、そうした乳房や脚が

待っていると思わせることが狙いで、「外地で戦う男たちは戦争が破壊した愛や親密さや慈しみの具現を女性の乳房に見た」という (Yalom 1997=1998: 202)。

国家の理想や大義を伝えるため、戦争によるダメージを心理的に補うため、出生率の向上を図るため、政治家たちは、家族、生命、愛、親密さ、エロスなど、乳房が持つ「母性的なイメージ」と「性的なイメージ」を煽り、増幅させ、巧みに利用してきた。

ここまで、乳房が様々な「主体」によって求められ、まなざされてきたことを確認してきた。乳房は、あるときは「母なるイメージ」として親しみと畏怖をもって扱われ、あるときは「女性性のシンボル」として性的な欲望を持ってまなざされてきた。そして、乳房が持つ「特別な力」は、ときに政治に、ときにビジネスに利用されてきた。それらのまなざしの「主体」は「乳房をもたない」男性たちだった。では一体、それらのまなざしは「乳房をもつ」女性たちにどのような、どれほどの影響を与えてきたのだろうか。

3. 「乳房の表象」が女性たちに与える影響

(1) 「二分化」される乳房

山崎 (2011) は『ひととはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』のあとがきで次のように述べる。

乳房表象の政治学では、「乳房をもつ者」と「乳房をもたない者」は明確に分けられてきた。そこでは前者は視覚化され、後者が表象の中心的生産／消費者になるという大きなジェンダー区分がある。表象の生成と受容の大きな力を握る側（主体）は、「乳房をもつ者」の身体を「乳房」という断片として把握し、それにすべてを収斂しながら他者化していく。

また同時に乳房表象には、善と悪、美と醜、健康と病、生と死など二項対立的な意味が付与され、「乳房をもつ者」はこれらのいずれかに配置されてきた。これらの意味は実際には複合的に顕在化されながら、二項対立的な乳房はすべての乳房を二分する。結果として、乳房をもつ者たち、すなわち女性たちは、必然的に善や美や健康という肯定的な要素による賛美と、悪や醜という否定的な要素による断罪を突き付けられていく。誰でもネガティブな刻印から逃れたい気持ちはあるだろう。そう思うからこそ、この構造自体が威嚇装置として女性たちの自我を引き裂いてきた (山崎 2011: 210-1)。

「乳房の表象」には「男性と女性を対置させながら、女性を二分化」し、「ジェンダー秩序の構築・再編」に関与する、強力な権力作用があるという (山崎 2011: 211)。

その権力作用に反抗すべく、1960年の終わりから70年代にかけてアメリカで女性解放運動が起こった。フェミニストたちは、社会の一員として声を上げ、「女性の権利と女性の体を女性の手に取り戻すための闘い」を繰り広げ、「これまで女性に課せられていた運命は天が与えたものではなく、男性が作り上げたものだ」と断言するに至った (Yalom 1997=1998: 356)。その中で、ブラジャーを焼く、ブラジャーをくずかごに捨てるパフォーマンス、「ブラ焼き」が行われた。この抵抗行動は「抑圧のくびきとしてのブラを脱ぎ捨て」

(Yalom 1997=1998: 262) る行為で、ノーブラは「自由と反逆のシンボル」だった (Yalom 1997=1998: 358)。「ブラ焼き」は、山崎 (2011) が述べた「乳房をもたない」者による乳房を「断片化」するまなざし、「善い乳房」と「悪い乳房」に二分するまなざしが、「乳房をもつ」者たちのアイデンティティに強い権力を発揮してきたことを逆説的に示していると言えるだろう。

「ブラ焼き」を行ったフェミニストたちの視座に立てば、「乳房をもつ」者である女性たちは「乳房をもたない」男性たちによって一方的に作り上げられた「乳房の表象」を負わされ、抑圧された無力な存在として浮上してくる。けれども、ここで疑問が湧く。本当に女性たちは「乳房の表象」をただ従順に受容してきただけなのか。あるいは、「ブラ焼き」や「ノーブラ」のようにラディカルな形で「乳房の表象」の意味に「抵抗する」ほかなかったのか。

(2) 乳がん経験者が語る「具体的」な乳房

「乳房の表象」が実際の女性たちにどれほどの影響を与えてきたのかを考え進めるにあたり、ここで表象分析の議論を離れ、筆者がインタビュー調査⁵⁾をした乳がんによって乳房の全摘手術を受けた女性たち (Cさん・Dさん・Fさん) の語りを紹介したい。乳がんが発見された女性たちは、否応なしに自らの乳房と向き合わざるを得ない局面に立たされる。乳がん罹患した女性は「病気と女性のシンボルの喪失という二重の苦しみ」(川添 2013: 178) を抱えるとも言われている。また、「乳房の表象」における「善と悪、美と醜、健康と病、生と死など二項対立的な意味」に照らせば、乳がん経験者の乳房はいずれもネガティブな意味を付与されることになってしまう。はたして、3名の女性たちは自らの「乳房」をどのようにとらえたのだろうか。

Cさんは40代半ばで乳がんが発覚して全摘手術を受けた。全摘後の胸はあばら骨が浮き上がり「痩せた男性のよう」で、Cさんはショックを受けた。それでも時間が経つにつれて次第に生活の不便も感じなくなり、「このままでいいかもしれない」とも思った。しかし、病院の患者会に参加して再建経験者に出会い、再建した乳房を触らせてもらったことをきっかけに失った胸への喪失感が強まり、再建手術を決意した。再建と同時に豊胸手術を受け、乳がん罹患する前よりも大きな胸を獲得した。Cさんはもともと“貧乳コンプレックス”を抱えていた。「(以前は)下着で誤魔化していたから、見た目は今と変わらないわけよ。お風呂に行くと、『あなたは詐欺だよ』って言われてた。その頃は、おっぱいって大きくても小さくてもいいんだと思っていただけ。自分が普通の大きさになってからは、おっぱいって女性のシンボルなんだなって、つくづく思う。他人の子どもでも、すぐおっぱいを触ってきたり。それって女性のシンボルだからでしょう」。失った胸を得ただけでなく豊胸したことで、「以前よりも人として女性として自信が持てるようになった」と物質的なふくらみだけでなく、精神的に豊かになったことを述べた。乳房再建の経験によって力を得たCさんは、乳房再建手術経験者による他の乳がん患者のためのセミヌード写真集のモデルになり、写真集デビューを果たした。また、乳房再建をテーマにした患者会を主宰し、精力的に活動を展開している。かつてのCさんにとって乳房は、下着を使って他人の目を「誤魔化さなくてはならない」存在だった。けれども、乳がんを機に再建と豊胸をし

て「普通の大きさ」になったことで、裸になっても堂々と「見せられる」胸を手に入れた。再建だけでなく豊胸をして美しさにこだわるCさんは社会・文化における「乳房の表象」の意味を積極的に受容していると言える。しかし同時に、これまでの「乳房の表象」が付与する乳がんへのネガティブなイメージ、「悪」「醜」「死」に対して抵抗もしている。写真集や患者会の活動を通して、乳がんを患う女性たちと社会に向けて、病いを抱えながら美を大事にして前向きに生きる姿を発信している。現在のCさんの乳房は、美しいだけでなく困難を生き抜く「勇敢な」乳房である。

Dさんは50代前半で乳がんが判明して全摘手術を受けた。その際、乳房再建は「見事に考えなかった」という。「若い時みたいに、男性の目を意識して着飾ることもなくなるし。胸自体は、結婚もしたし、子どもにおっぱいはあげたし、もう役目は済んでいるから（乳房再建はしなくて）いいって思いました」と、母性や女性性という乳房に付与された意味や役割を踏まえながらも、現在の自分に乳房再建は不要とした思いを話した。その一方で、「若い人はそうは思えないだろうから大変だと思う」と言い、年齢によって乳房の役割や重要性が変化することを語った。Dさんにとっての乳房は、男性の目を惹き付けるものであり、夫との関係において意味を持つものであり、子どもが生まれてからは子どもを育てる機能として存在していたことがわかる。ライフイベントにおいて果たすべき役目をしっかりと果たした乳房は、Dさんにとってそれ以上に重要な意味を持つものではなく、乳がんが発見された際には躊躇なく手放された。

Fさんは60歳のときに乳がんが発見された。主治医に部分切除を提案されたが、「嫌なものがあった場所は全部取りたい」と自ら全摘を希望した。乳房を喪失することに抵抗はなく、「私はとっくの昔に女を捨ててる。今からどうこうという興味も全然ない。フラッとそういう人が来れば無視はしないですけどね」と冗談交じりに話した。Fさんはもともと胸が大きいため、全摘した胸と残った胸の差が大きくなってしまった。「残った方の胸が本当に鬱陶しい、ない方が楽」と、失った胸を再建するのではなく残った胸を取ってしまいたいという。ここで注目するのは、乳房を失うことに躊躇しなかったという話に付随して、「とっくの昔に女を捨ててる」という表現があることだ。この語りは、乳がんになるより前のFさんの人生で、特定の男性との関係においてFさんが「女」であったこと、その関係の中で乳房が重要な位置にあったことを伺わせる。その後、男性との関係は終わり、Fさんは「女」を捨て、乳房は不要になった。乳がんがわかった時点で、「女」であることはFさんのアイデンティティを規定しておらず、乳房は重要でなかったことから迷わず全摘を選んだ。

3名は、乳房に付与された「母性」や「女性性」という「乳房の表象」の意味を認識している点は共通していたが、その受け止め方は異なっていた。Cさんはかつて乳房にコンプレックスを持っていたが、乳がんを機に乳房再建と豊胸を行うことで女性として人としての自信を強めた。Cさんは「乳房の表象」の意味を「受容」しながら、同時に「乳房の表象」が乳がんが付与してきた負のイメージに「抵抗」していた。DさんとFさんは全摘後に乳房再建をしていない。乳房再建をしない理由を、Dさんは「(乳房の)役目が済んだ」、Fさんは「女を捨てているので不要」と話した。2名にとっての乳房は、かつては意味があったが、乳がんと判明した時点では重要でなかった。彼女たちは「乳房の表象」の意味

を認識しながらも、その意味をさらりと受け流していた。

4. おわりに

これまで「乳房の表象」は様々な立場から「複層的な意味」を付与されてきた。女性の乳房は「賞賛」または「断罪」に二分され、女性たちはあたかもその価値観を「受容するか」または「抵抗するか」しかないかのような論じ方がされてきた。本稿では、そのような二項対立の図式的なとらえ方に疑問を投げかけ、乳がんを経験した女性たちが語った「具体的」な乳房を紹介した。そこから見えてきた女性たちの乳房は、社会・文化における「表象の意味」の影響を受けながらも、「表象の意味」に収まりきらない在り方をしていた。一人一人の女性の「具体的」な乳房は、不特定多数の他者のまなざしの中に、パートナーとの触れ合いに、子を育てる機能として、「女性」であることの自己像に、そして肉体そのものに、ゆらぎながら存在している。それぞれに異なる人生の歩みと乳房との付き合いがあり、同一人物においても年齢やライフステージが変わる中で、乳房の意味合いや重要度合いも移ろっていくことが見えてきた。「乳房の表象」が実際の女性たちにどれほどの影響を与えてきたのかを明らかにするには、ここで取り上げた3名の断片的な語りだけでは不十分である。それでも、「乳房の表象」の言説とは異なる位相に、「具体的」な乳房が存在することを明示することはできただろう。

筆者は現在も乳がんを経験した女性たちへのインタビューを継続している。乳がんの経験の語りを通して、現代を生きる女性たちの「具体的」なく身体>とく生>が社会の中でどのように他者と関わり、どのようなゆらぎを持って存在しているのかを明らかにしていきたい。

註

- (1) 日本乳癌学会, 「全国乳がん患者登録調査報告 2011 年次症例」
- (2) 国立がん研究センター, 2015 年のがん統計予測
- (3) <http://www.sankei.com/west/news/140512/wst1405120082-n1.html> (2016 年 8 月アクセス)。「取り調べ、勘当、波乱の人生『日本初のヌードポスター』モデル女性の“その後”…大正 12 年、サントリーHD『赤玉ポートワイン』」
- (4) 古代のギリシャ・ローマで解放された奴隷が被っていた帽子
- (5) インタビュー調査は 2014 年 9-10 月に東京・神奈川で行った。対象者は、筆者ががんに関するイベントに参加して知り合った人、乳がん患者会の見学で知り合った人、調査対象者によって紹介してもらった人に依頼した。事前に調査協力依頼書と研究倫理遵守の誓約書を送付し、協力の承諾を得た。調査は 1 回あたり 90 分程度、対象者が指定した場所、病院のラウンジやカフェ等で行った。半構造化インタビューで、乳がんが発見されてから現在に至るまでの経緯や心情を中心に語ってもらった。

参考文献

- 深井晃子, 2014, 「揺れ動くおっぱい ファッションと女性性への視線」乳房文化研究会編『乳房の文化論』淡交社,249-74.
- 池川玲子, 2011, 『聖戦』論理の構築』山崎明子・黒田加奈子・池川玲子・新保淳乃・千葉慶『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』青弓社,93-130.
- 鎌田東二, 2014, 「チチとホト-乳房の日本文化史」乳房文化研究会編『乳房の文化論』淡交社, 93-110.
- 川添裕子, 2013, 『美容整形と〈普通のわたし〉』,青弓社.
- 北山晴一, 2014, 「乳房の社会学」乳房文化研究会編『乳房の文化論』淡交社,9-42.
- 黒田加奈子, 2011, 「男／女の差異化—医学的言説における乳房」山崎明子・黒田加奈子・池川玲子・新保淳乃・千葉慶『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』青弓社, 23-62.
- 乳房文化研究会編, 2014, 『乳房の文化論』淡交社.
- 表智之, 2014, 「少年マンガにおける美少女の身体」乳房文化研究会編『乳房の文化論』淡交社, 201-28.
- ROMI, 1965, *Mythologie Du Sein*, Paris: Jean. (=1997, 高遠弘美訳, 『乳房の神話学』青土社.)
- 新保淳乃, 2011, 「都市秩序の再生」山崎明子・黒田加奈子・池川玲子・新保淳乃・千葉慶『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』青弓社,131-70.
- 上野千鶴子, 2014, 「感じる乳房—誰のものか?」乳房文化研究会編『乳房の文化論』淡交社, 43-66.
- Yalom, Marilyn, 1997, *History of the Breast*, New York: Ballantine Books. (=1998, 平石律子訳, 『乳房論—乳房をめぐる欲望の社会史』筑摩書房.)
- 山口恵理子, 2014, 「乳房に恵まれる ヨーロッパにおける授乳するマリア像」乳房文化研究会編『乳房の文化論』淡交社, 149-74.
- 山崎明子・黒田加奈子・池川玲子・新保淳乃・千葉慶, 2011『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』青弓社.
- 山崎明子, 2011, 「あとがき」山崎明子・黒田加奈子・池川玲子・新保淳乃・千葉慶『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』青弓社,207-13.
- 米澤泉, 2014, 『女子』的乳房 メディアと下着と身体と」乳房文化研究会編『乳房の文化論』淡交社, 275-302.